

独立行政法人教員研修センター委嘱事業

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム
(平成 19 年度 教育課題研修)

報 告 書

プログラム名	「教科を貫く国語力」育成のための授業改革リーダー養成研修
プログラムの特徴	情報を処理・操作する能力を中核とした「教科を貫く国語力」育成に向け、授業改善を推進する教員を養成する。各教科等の関連を図った国語力育成により、学校全体の授業改善力の向上を図る研修プログラムを開発した。

平成 20 年 3 月

山 形 大 学 山形県教育委員会

I 開発の目的・方法・組織

1. 開発目的

中央教育審議会は国語力の重要性について次のように述べている。

- ・「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。」（義務教育答申）
- ・「国語科を中核としながら、国語科以外の教科と連携し、すべての教育活動を通じて、読む力や書く力などを育成していくプロセスを明確にした指導が求められる。」（審議経過報告）
- ・「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な視点である。」（平成 20 年 1 月 17 日答申）

これらの指摘にみられるように、国語力はすべての教科において育成するものであり、各教科等を通じ、学校の教育活動全体で取り組む必要がある。具体的には、国語力育成の中核となる国語科の授業改善と他教科で活用するもしくは育成する国語力の解明、国語科と他教科との関連を図った指導計画の改善等が必要となる。また授業改善の取組が実効性をもつためには、組織として、すなわち学校における授業研究研修（以下、校内研究）として機能させていくことが有効である。そこで本研修においては、各教科等の学習指導をコーディネートしつつ、国語力育成のための授業改善を連続的に展開する研究推進役としての授業改革リーダー養成をめざした。

2. 開発の方法

①本プログラムにおいて目指す資質

上記目的を踏まえ、本研修の受講者には、「教科を貫く国語力育成を図る授業づくり・研究推進体制づくり」の知識・技術を身に付けることを目指した。その具体的な内容は次の通りである。

ア 教科を貫く国語力の概念理解

- ・教科を貫く国語力の全体像の把握
- ・各教科等において育成すべき国語力の具体像の解明手法

イ 付けたい国語力を明確にした授業構築力

- ・付けたい国語力を明確化する学習指導案構築
- ・これまでの指導のどこをどう改善したかを明確に提案する授業構築

ウ 国語力育成を図る校内研究推進体制づくり

- ・校内研究スタイル改善や事前研・事後研の機能強化
- ・各教科・各学年における国語力育成を関連付けるコーディネート手法
- ・「Before-After 方式」での授業改善成果の把握と研究成果の普及・発信方法

②本プログラムの対象者

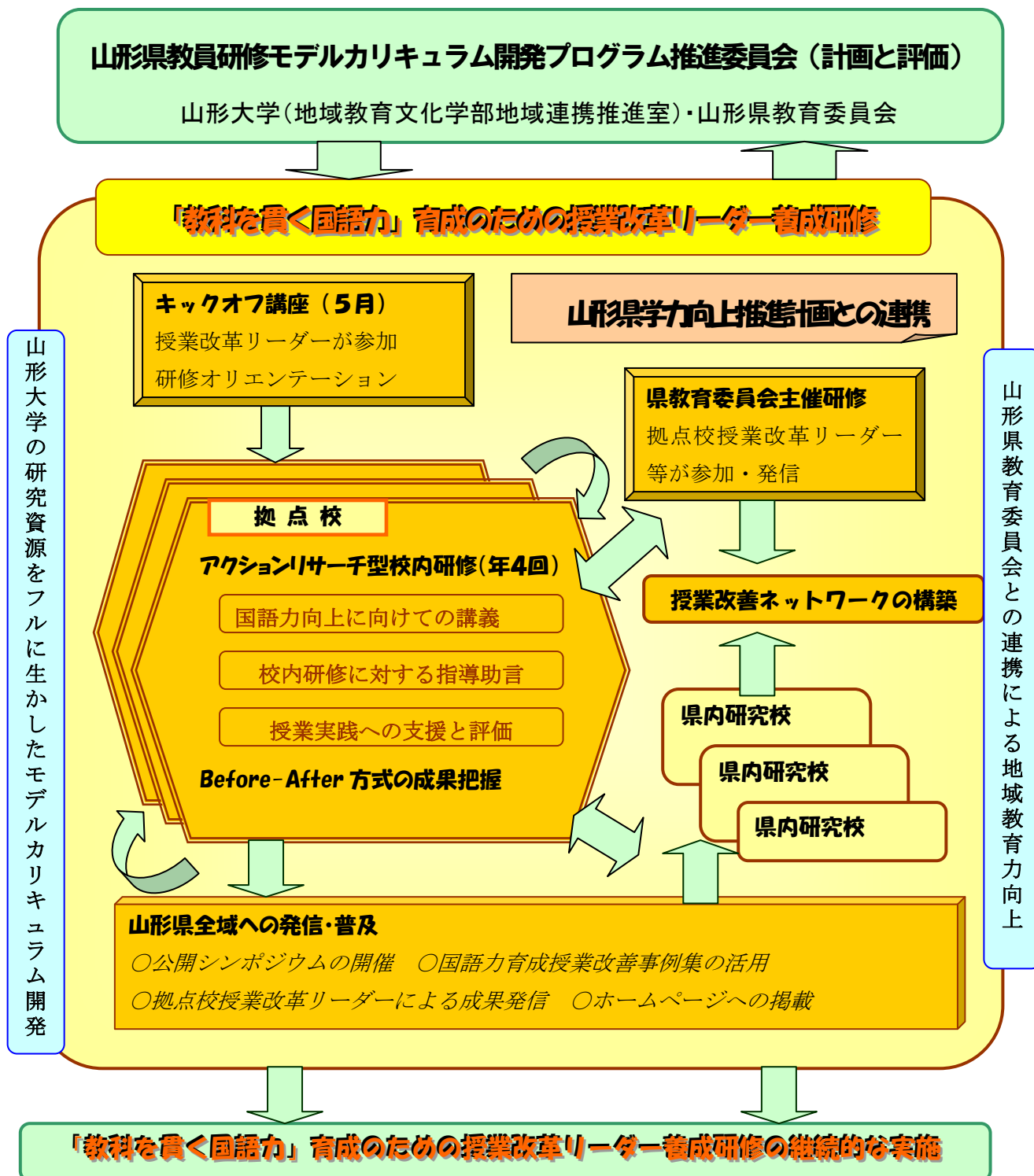
国語力育成に当たっては、学校全体としての取組が必要であることに鑑み、

山形県内の小中学校計 8 校を開発拠点校に指定して研修を実施することとした。指定に当たっては、県教育委員会を通して募集・選定を行った。

③本プログラム開発の具体的方法

開発拠点校に山形大学アドバイザーを 1 名ずつ配置し、年間を通じて校内研修に関わるとともに、研修の展開に応じて研修講座を開講した。

3. 開発組織



【資料1】 開発に当たっては、以下のような「実施要項」に基づき、事業を展開した。

独立行政法人教員研修センター「平成19年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」

『教科を貫く国語力』育成のための授業改革リーダー養成研修 カリキュラム開発実施要項

山形大学地域教育文化学部

1 趣旨

独立行政法人教員研修センター「平成19年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム（教育課題研修）」に基づき、山形県教育委員会との連携のもとに市町村教育委員会の協力を得て、教員研修カリキュラムのモデルとして『教科を貫く国語力』育成のための授業改革リーダー養成研修カリキュラムを開発する。

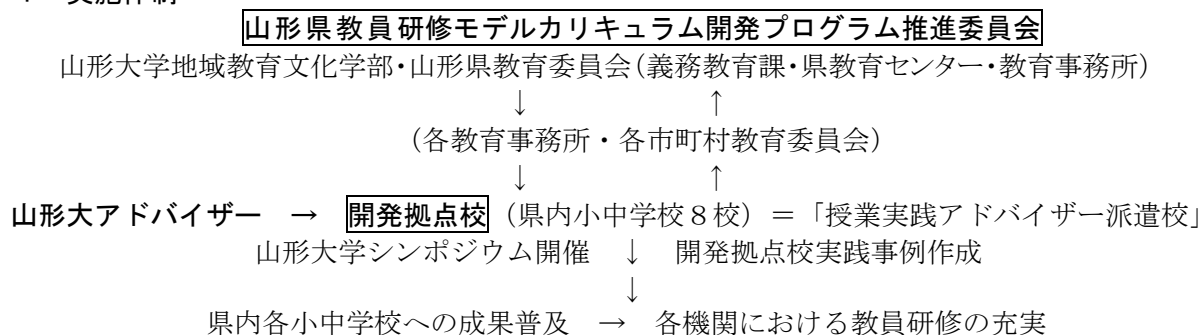
2 開発のねらい

- (1) 山形大学と山形県教育委員会の一層の連携により県の教育の質の更なる向上を図る。
 - ①開発拠点校8校における、PDCAを生かした研究推進と確かな学力の向上
 - ②山形大学アドバイザーとの共同研究を生かした、教科の本質に迫る授業改善の推進
 - ③公開シンポジウム開催、研修テキストとしての実践事例集作成による県全域への成果普及
 - ④「教科を貫く国語力」育成を視点とした、平成20年度の告示が見込まれる新学習指導要領への積極的対応
- (2) 平成20年度以降に関係機関において実施が期待される教員研修カリキュラムのモデルづくり。
- (3) 山形大学教職大学院設立を視野に入れた大学におけるカリキュラム開発の基盤づくり。

3 開発期間及び経費

開発期間：平成19年度 1年間 開発経費：独立行政法人教員研修センター委嘱経費

4 実施体制



5 実施に当たって

開発拠点校におけるカリキュラム開発を重点的かつ効果的に行うため、山形県教育委員会が実施する「教員フォローアッププログラム事業」授業実践アドバイザー派遣校を開発拠点校として指定する。

6 実施計画 (略)

II 開発の実際とその成果

1. プログラム開発全体の実施状況

開発の全体の実施状況は以下の通りである。

時 期	内 容
4月	○開発拠点校募集
5月18日	○開発拠点校の決定・通知
5月29日	○第1回教員研修モデルカリキュラム開発プログラム推進委員会(概要説明)
5月29日	○キックオフ講座(オリエンテーション・講義「教科を貫く国語力」等)
6月～12月	○開発拠点校における研修の実施 ・アクションリサーチ型校内研修(アドバイザーが継続的に共同研究を行う校内研修)
8月17日	○中間期情報交換会(含 実践事例集作成に向けて)
12月	○実践事例集原稿とりまとめ
1月30日	○「教科を貫く国語力育成シンポジウム in やまがた」開催
3月10日	○第2回教員研修モデルカリキュラム開発プログラム推進委員会(事業評価)
3月	○教員研修センターへ報告書提出

このうち、直接研修に関わるものは、以下のように大別される。

- (1) 開発拠点校の推進教員を対象とした基幹的研修
 - ①キックオフ講座
 - ②中間期情報交換会
- (2) 研修テーマに基づき、各開発拠点校の実態や課題を生かして山形大学アドバイザーとともに研修
 - ①アクションリサーチ型校内研修
- (3) 授業改革リーダーとして研修成果を広く普及するための研修
 - ①「教科を貫く国語力育成シンポジウム in やまがた」の開催
 - ②授業改善事例集の作成

2. キックオフ講座・中間期情報交換会(開発拠点校の推進教員を対象とした基幹研修)

(1) 研修のねらい

①キックオフ講座

研修のスタートに当たって、拠点校の研究推進を担う中堅教員を対象に、教科を貫く国語力の概念理解を図るオリエンテーション講座として開催した。

現在、授業実践の場における PISA 型読解力等を含めた国語力育成は十分とはいえない状況である。その原因として、我が国の国語教育などで用いられてきた「読解力」と大き

く異なる PISA における読解力の定義への理解不足や、各教科等を貫く国語力の具体的な姿が十分とらえられていないことなどにより、国語科において文学的な文章の詳細な読解に偏る傾向が見られたり、国語力の向上は国語科だけで取り組めばいいといった誤解が生じたりしていることがあげられる。そこで、『読解力向上に関する指導資料』（平成 17 年 12 月文部科学省）や中教審審議経過報告において、「国語科を中核としながら、国語科以外の教科等と連携して、すべての教育活動を通じて読む力や書く力などを育成していく」ことが指摘されたことを踏まえ「教科を貫く国語力」の育成について共通理解を図る場を設定した。

②中間期情報交換会

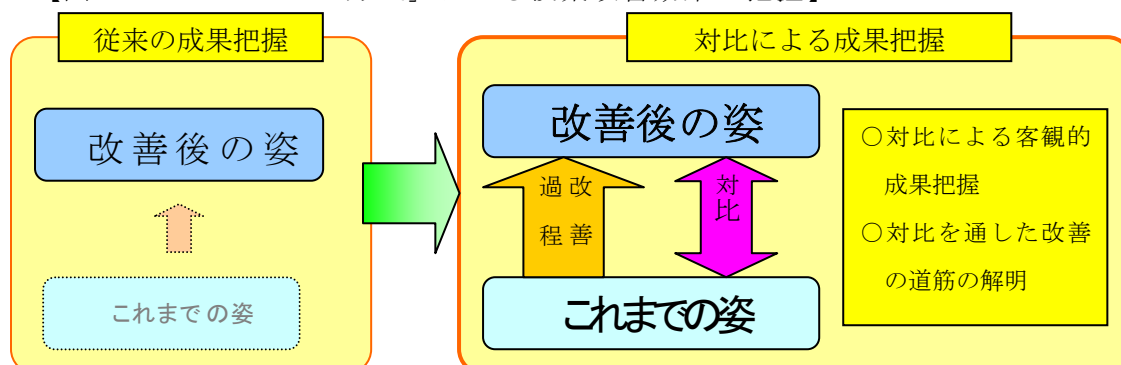
各開発拠点校における研修がある程度進んだ段階で、各校の取組状況を情報交換するとともに、「教科を貫く国語力」のとらえ方を確認し、成果を集約する見直しを持つための研修会として開催した。研修成果把握の際、「Before-After 方式」を採用することとし、その手法についても共通理解を図った。「Before-After 方式」は、山形県内で独自に開発された授業改善効果の把握方法である。研究成果を今後の授業改善に活用可能な形で把握する画期的な手法といえる。具体的には、これまでの授業の課題点（Before）を明らかにした上で、どこをどう改善するかを解明して手立てを導く。その手立てによって得られた姿（After）とを対比することで、授業改善の道筋を明らかにしようとするものである。

従来の校内研究における「成果把握」の際の課題として、

- ・実践の最終的な姿だけを提示することが多く、現状のどこを課題ととらえ、どう改善したのかという授業改善プロセスが見えにくい。
- ・成果を把握するための客観的なデータ収集の際、検証データが学力調査やアンケート結果といった特定のデータに偏ったり「生き生きと表現できるようになった」といった抽象的な成果把握にとどまったりしている。

といった現状があげられる。そのため、校内研究の成果が次の授業改善に活かされにくく、研究・授業改善を連続的に推進する上での阻害要因ともなっている。そこで「Before-After 方式」においては、成果把握をこれまでの現状分析からスタートさせ、改善の手がかりを導き出すというプロセスをたどりながら行っていくこととしている。（図 1）

【図 1：「Before-After 方式」による授業改善効果の把握】



「Before-After方式」は、単に取り組んだ状況だけを記載した事例集に比べて、授業改善プロセスを明らかにしているため、成果を実践者のものだけにとどめず、各学校・各授業者等の実情に合わせて活用できる点がある。

中間期情報交換会においてはこの方式による事例を紹介し、その具体的な作成方法についても共通理解を図った。

(2) 研修の実施方法等

①キックオフ講座

ア 日時 平成19年5月29日()午後1時30分～4時30分

イ 会場 山形大学地域教育文化学部 1 館2階 大会議

ウ 内容

	13:30	13:45	14:25	15:25	15:40	16:10	16:30
受付	開会	オリエンテーション「研修の趣旨と概要」 地域教育文化学部 水戸部修治講師	特別講義「言語がもつ本質的機能」 地域教育文化学部 小川雅子教授	休憩	説明 今後の研修の進め方と 事務手続き	諸連絡	閉会

エ 参加者

- ・開発拠点校 12名(各校1～2名)
- ・教育事務所指導主事 2名

オ 使用教材

- ・ワーポイント説明資料「教科を貫く国語力とは」
- ・説明資料「説明：研修の概要」「研修を進めるに当たっての意事(研修の具体的手続きと経費の行方法について)」「実施報告書の様式」
- ・特別講義資料「言語が持つ本質的機能」

②中間期情報交換会

ア 日時 平成19年8月17日()午前10時00分～午後3時45分

イ 会場 山形大学地域教育文化学部 1 館2階 大会議

ウ 内容

	10:00	10:10	11:10	11:40	12:40	13:40	15:00	15:40
受付	開会	講義「教科を貫く国語力」の具 体像の解明 水戸部修治講師	研究発表 国語科・算数科を 通した表現力の 育成 山辺町立大寺小 学校	昼 食 休 憩	取組状 況報告 小1校 中1校	グルー プ協議 情報交 換	説明 研究成果 の集約の 仕方	閉会

エ 参加者

- ・開発拠点校 13名(各校1～2名)
- ・関係教育委員会指導主事 5名

オ 使用教材

- ・ ワーポイント説明資料「教科を貫く国語力の具体像の解明」
- ・ 成果把握の方法に関する資料
- ・ 説明資料「今後の研修について（事例集作成の手順・公開シンポジウムの開催について）」
- ・ 進校事例発表資料「国語科・算数科を通じた表現力の育成」
- ・ 各開発拠点校持ち寄り資料「本校の取組状況」

（３）研修の評価及び課題

①キックオフ講座について

1年間の委嘱期間における研修を実効性のあるものにするため、可能な限り早い段階で開催することを目指した。この講座を切り口に、各校におけるアクションリサーチ型校内研修を本格的に実施することとなるが、5月中に本講座を開催し、説明を行うことによって、各校の研修を6月からスタートさせることが可能となった。

面、開発拠点校決定からほとんど間もなくの開催となったため、準備期間等の時間が常に短くなった。ごく短期間に開催可能となったのも、県教育委員会及び該当教育事務所の全面的な協力を得ることができたからであると考えられる。

②中間期情報交換会について

「教科を貫く国語力」育成をテーマに、積極的に取り組んできた小学校の研究主任から、その実践の成果について事例発表いただいた。また、開発拠点校の取組を基に「教科を貫く国語力」の理論的枠組みを講義によって提示した。「Before-After方式」については、これまでに収集した事例をもとに、具体的にまとめ方を解説した。

各校における取組の情報交換の時間では、グループ協議により互いの取組について互心な質が交わされた。

各校の研究推進教員が集まったの研修は、拠点校方式の研修を進める上で常に重要な意味を持つが、各校において研修内容をどのように広めていくかについては課題があった。各校におけるアクションリサーチ型校内研修とのより有機的な関連を図った実施方法を工夫することが必要である。

3. アクションリサーチ型校内研修（研修テーマに基づき、各開発拠点校の実態や課題を生かして山形大学アドバイザーとともに行う研修）

（１）研修のねらい

山形大学のスタッフが、担当する拠点校を訪問してアクションリサーチ型の研修を行う。これは、各拠点校が「教科を貫く国語力」育成のために立てた研修計画に基づき、大学スタッフが共同研究者として継続的に関わることで、国語力向上に向けた授業改善・研究推進を支援するものである。単発的な研修に比べ、課題や悩みを共有しながら、各拠点校の実情に応じた適切な研修を行える点に特徴がある。すなわち、大学教員等が授業研究会の当日だけ訪問して、外部から指導

するのではなく、拠点校教員とともに授業を構築していく共同研究者として関わることとなる。

主な内容は、

①山形大学アドバイザーが開発拠点校を 問して行う研修

・講義、授業研究への助言等

②開発拠点校教員が、アドバイザーの研究 等に 問して行う研修（相 等）

・研究計画や研究のまとめ方等に関する相 や授業研究会に向けての事前の学習指導案の検討

等である。

（２）研修の実施方法等

開発拠点校	アドバイザー	主な研修内容(月日)
山形市立第二小学校	水 部修 講	○教科を貫く国語力についての講義・ 習 (7/23) ○Before-After 方式による成果把握の 習(8/20) ○授業研究会 (10/10,10/12) ○授業研究会に向けた指導案検討 (9/28,11/5,11/8)
新 市立 野 小学校	水 部修 講	○授業研究会に向けた指導案検討 (6/7,10/2) ○授業研究会 (6/21,10/19,11/28) ○教科を貫く国語力についての講義・ 習 (8/27)
長 市立 小学校	間 明教授	○授業研究会 (7/9,11/27,12/19) ○授業研究会に向けた指導案検討と講義(11/13)
市立 小学校	水 部修 講	○教科を貫く国語力についての講義・ 習 (8/29) ○授業研究会 (9/24,10/26,1/16) この他学習指導案検討を電子メール等で実施。
町立中 川小・中学校	今村 教授	○授業研究会に向けた指導案検討 (6/21,11/7) ○授業研究会 (7/4,11/26)
山形市立第 中学校	出 教授	○授業研究会 (6/6) ○教科を貫く国語力についての講義 (7/30)
日町立 日 中学校	出 教授	○授業研究会 (5/14,9/13) ○教科を貫く国語力についての講義 (7/27,10/17) ○研究の進め方について指導助言(7/25)
川 町立第二 中学校	大 教授	○校内研究会への助言指導(6/28,8/27) ○授業研究会(9/14,11/12)

（３）研修の評価及び課題

開発拠点校に対して1名ずつのアドバイザーを配置したことにより、年間を見通

して継続的に共同研究することができた。特に授業研究会に単発的に参加するのではなく、事前検討会の段階から参加し、授業者の思いや みを共有しつつ、授業研究会に参加し、助言指導を行うことが可能となった。

その 面、アドバイザースタッフの対応回数が増えるため、一人が対応できる学校数は最大でも3校程度であろうと考えられる。今後より広く展開するためには、各教育委員会等においてこのような学校研究を支援するシステム構築が求められる。

4. 「教科を貫く国語力育成シンポジウム in やまがた」の開催と授業改善事例集の作成（授業改革リーダーとして研修成果を広く普及するための研修）

（1）研修のねらい

研修成果を広く普及するため、全県の小中学校教員から参加者を募る公開シンポジウムを行った。開発拠点校作成の改善事例集（資料2）をテキストに、国語力育成のための授業改善についてのポスターセッション・ネルディスカッション・講義を内容として開催した。

（2）研修の実施方法等

①開催日時 平成20年1月30日（水）午前10時30分～午後4時40分

②会場 山形国際交流プラザ ッグウイング

③日 程

10:30	12:00	12:30	13:15	13:30	14:45	15:00	16:40			
受付 (午前)	オープニング	開発拠点校 ポスターセッ ション (25分 3回)	昼食 休憩	受付 (午後)	全体開 会行事	基調 提案	ネル ディス カッ ション	休 憩	特別講 文部科学省 上一 科調査	閉 会

④参加者 全国教育関係者（小中学校教員・教育行政職員・大学教員・学生等）

約300名

使用教材 国語力育成授業改善事例集『教科を貫く国語力』（資料2・後掲）

（3）研修の評価及び課題

中央教育審議会答申（平成20年1月17日）が「教育内容の主な改善事項」第1目に掲げる「言語活動の充実」と 接に関連したテーマであるため、山形県内はもとより全国各地から300名を超える参加者が集まった。参加者アンケートによれば、シンポジウム開催の意義を高く評価する意見が大多数であり、時間を得た研修会で、今後の研修の参考になったとの感想が多く せられた。また特に、「教科を貫く国語力」育成について理論面から文部科学省・ 上一 教科調査 の講

をいただいたことが 重要な研修機会であったとの意見が多数 せられた。

開発拠点校推進教員によるポスターセッションにおいても、多彩な実践を紹介する中で、拠点校教員自身が地域の研修リーダーとして自信をもって提案することができた。

大きな成果を得たシンポジウムであったが、 には多大な時間を確保する必要があった。各教育委員会等において実施する場合は、費用の確保も課題であ うと思われる。

大学・教育委員会連携による研修についての考察

1 連携を推進するための要点

(1) 目的の共有

教員研修において大学と教育委員会の連携を推進するためには、まず 者が目的を共有することが大切なものとなる。地域の教育の質を向上させることは、教育委員会はもとより、大学においても重要な使 であると考えられる。中でも、教育実践の場において直面する 課題の解決に対応できる研究成果を 元していくことが求められる。

また、 方の関係は、互 的であることが重要である。すなわち、大学が地域に するばかりではなく、教育委員会と連携して小中学校等と共同研究を推進することによって、研究の質や価 を高めることが可能となる。

さらに、研修課題の設定に当たっては、地域の教育の課題を踏まえつつ、十分な連携を図ったうえで絞り込んでいくことが大切なものとなる。教育委員会からは、地域の教育において何が課題であると考えなのか、小中学校においてどのようなニーズがあるのかを具体的に大学に示すとともに、大学はそれらの課題を大学自身の課題でもありとらえてその解決に共同で取り組むことが重要であ う。

(2) 実態や機能に即した連携の の設定

都道府県及び政 指定都市教育委員会と大学が連携する場合、それぞれの部 の機能に応じて実効性のある連携の を設定することが必要である。 者ともその組織は大きなものであるため、役割が細分化されている。全体を する部 と、各学校により近い部 それぞれが有機的に連携を図ることが必要である。

その際、大学と教育委員会が従前から連携している場合が多いと考えられることから、全く新たな を立ち上げるのではなく、 の を十分活用し、効 的な連携を図ることが望ましい。

2 連携による成果と今後の課題

本学部が開催した公開シンポジウムでは、県内小中学校等からこれまでにはないほ

ど多くの参加を得ることができた。また参加者からは、大学主催による研修会が今後の授業改善の方向性を考える上で 常に参考になったとの感想が多かった。県内 8 小・中学校を開発拠点校として組織したことにより、実践的で幅広い研究成果を提示できたこと、各市町村教育委員会の協力を得て県内全小中学校に開催案内を知できたこと等が要因であったと考えられる。

このような連携を持続・発展させていくためには、大学としてはスタッフの確保、教育委員会としては 算 置が大きな課題であ ろう。

IV その他

1 『教科を貫く国語力』育成のための授業改革リーダー養成研修』マスコミ報道一覧

期日	媒体	社名	番組名・タイトル等	備考
平成 19 年 6 月 4 日 (月)	新聞	山形新聞	教育面「基本はやはり国語力」	キックオフ講座について
平成 19 年 7 月 4 日 ()	テ	NHK 山形	やまがたニュースアイ 「国語力」を育て	開発拠点校 (中 川小・中) の実践を紹介
平成 19 年 11 月 4 日 (日)	テ	山形	特集 組「学力を上げる」	開発拠点校 (二小) の実践紹介・開発チーフコメント
平成 20 年 1 月 30 日 (水)	テ	山形	News リアルタイム「今日のニュース」	国語力育成シンポジウム開催を報道
平成 20 年 2 月 4 日 (月)	新聞	山形新聞	教育面「教科を貫く国語力育成シンポ・上 確かな学力に不可欠」	国語力育成シンポジウム・ネルディスカッションを特報
平成 20 年 2 月 11 日 (月)	新聞	山形新聞	教育面「教科を貫く国語力育成シンポ・下 子ども表現力すごい」	国語力育成シンポジウム・ネルディスカッションを特報
平成 20 年 2 月 12 日 ()	テ	山形	YBC 社説 「教科を貫く国語力」	研修の取組全体を紹介・開発チーフコメント

教科を貫く国語力の具体像の解明

資料2 授業改善事例集 (抜粋)

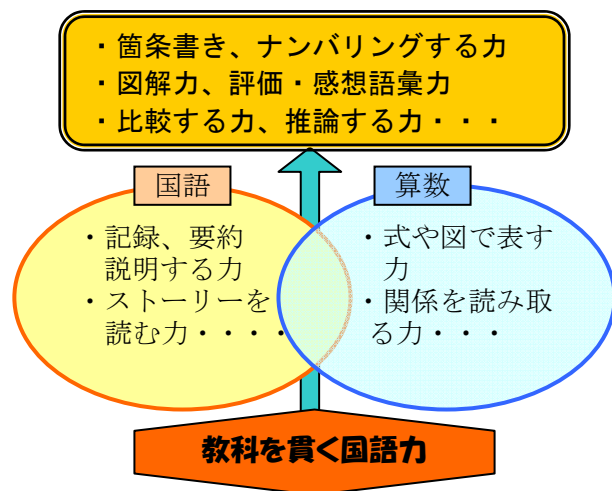
1 「教科を貫く国語力」とは

授業研究会で、様々な教科等の授業について「文章や資料を読む力が付いていないために、授業のねらいが十分達成されなかった。」「言語表現力が付いていないために、子どもたちの良さが十分生かし切れなかった。」といったことが話題になる場合があります。

「国語力」と聞くと、国語科でのみ育成する能力と思われがちです。しかし、各教科等の授業を分析すると、それぞれのねらいの実現に国語力が大切な役割を果たしていることが分かります。

◆◆各教科等では◆◆

学習指導要領の各教科等の目標や内容には、従来から国語力が位置付けられています。例えば右図のように、数学的思考力を高める上でも、解き方を説明したり、比較したりする国語力を具体的に位置付けて指導することが大きな鍵となります。



◆◆国語科では◆◆

各教科等で活用可能な国語力を明らかにすることは国語科の授業を改善することにもつながります。例えば「読む能力」も、児童生徒の実生活・実社会で生きて働くように、筆者の主張を端的にとらえ内容を大づかみに把握して読む能力や、読んだことを基に自分の意見を論じたりする能力など幅のある全体像をおさえた指導構想が可能となります。

◆◆中央教育審議会において重要な力として規定◆◆

「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。」(義務教育答申)、「国語科を中核としながら、国語科以外の教科と連携し、すべての教育活動を通じて、読む力や書く力などを育成していくプロセスを明確にした指導が求められる。」(審議経過報告)等の指摘があります。さらに中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(平成20年1月17日)では、「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な視点である。」としています。

◆◆全国学力・学習状況調査でも調査問題として出題◆◆

平成19年4月に実施された「全国学力・学習状況調査」でも、上図のような「箇条書きする力」や「比較して読む力」、「図を読解する力」が問われました。

2 「教科を貫く国語力」の具体化

各教科における言語活動の充実が、今回の学習指導要領改訂の柱となるものです。そのためには教科を貫く国語力の育成が、いっそう望まれます。ではいったい教科を貫く国語力をどのように具体化していけばいいのでしょうか。

(1) 各教科に共通する思考力の洗い出し～現行学習指導要領の再確認～

国語力を規定する要素の一つに、思考力があげられます。文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月3日）では、国語力の中核に、「考える力、感じる力、想像する力、表す力から成る言語を中心とした情報を処理・操作する領域」を位置付けています。

下記のように、現行学習指導要領にも、各教科等に共通した思考力が位置付けられています。すなわち、各教科等の固有の目標には、国語力の育成が重要な要素として位置付けられており、各教科等の目標の実現と国語力の育成は別個のものではないことが分かります。

①比較・分類する力

教科等	学年	現行学習指導要領における位置付け
社会	第3・4学年	地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える。
算数	第4学年	目的に応じて資料を集め、分類整理したり、特徴を調べたりする。
理科	第3学年	比較しながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究する。

②自分の考えを明確にし、多面的に追究する力

教科等	学年	現行学習指導要領における位置付け
国語	第5・6学年	事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読む。
社会	第6学年	社会的事象の意味をより広い視野から考える。
理科	第6学年	見いだした問題を多面的に追究する。

(2) 表現様式の明確化

報告書を書く、解説を読む、対話する……。日常の言語生活においては、国語力はこのような具体的な姿（表現様式）として現れます。各教科等における言語活動を充実するためには、児童生徒がこれらの様式を自覚的に活用できるようにすることが大切です。

◎各教科等で活用する表現様式を明らかにしよう

「作文」→観察記録文、調査報告文、礼状、依頼状・・・

「発表」→手順説明、提案スピーチ、推薦・・・

「交流」→グループ協議、バスセッション、討論会・・・

(3) 読書活動の推進

文化審議会は答申（前掲）の結びを、「国語力の向上のためには、『自ら本に手を伸ばす子供を育てる』ことが何よりも大切であるという共通認識に立って、この答申をまとめた。」と締めくくっています。また、中央教育審議会答申（平成20年1月17日）においても、各教科等における言語活動を支えるものとして「読書活動の推進」をあげています。

◎学校の教育活動全体を通じた読書活動を推進しよう

Point1：各教科等の「授業における読書活動」を意図的・計画的に行いましょう。

Point2：「比べ読み」「並行読書」「シリーズ読書」など、多彩な読書活動を構想しましょう。

Point3：保護者や地域の図書館関係者、読書ボランティアとの連携を図りましょう。

Point4：都道府県等の子ども読書活動推進計画を活用しましょう。

3 学校全体で取り組むための手立て

(1) 重点化のためのステップ

これらの国語力育成に当たっては、学校全体の取組が不可欠です。学校として例えば次のようなステップで重点的に取り組んでいきたいものです。

Step 1: 各教科等で共通に取り組む国語力のリストアップ

○各教科等で必要な国語力を、学年や教科の枠を越えて列挙します。
 (例) 表現様式：説明・要約・記録・紹介・報告……
 交流形態：ペア学習・グループ協議・討論……
 思考力：比較・分類・関係付け・推論……
 読書活動：比べ読み・シリーズ読書・テーマ読書……

Step 2: 発達段階ごとの重点化

○列挙されたものをもとに、当該学年（部）で各教科等を通じて重点的に指導するものを選びます。
 (例)

	表現様式	交流形態
低学年：	観察記録文……	ペア学習……
中学年：	調査報告文……	グループ協議……
高学年：	意見文……	会議……
中学校：	書評・評論……	討論……

Step 3: 教科等の関連を図った年間指導計画・単元の指導計画の構想

《参考》各教科等で育成・活用したい28の国語力

- 引用力、要約力、図説・図解力、読書力・読解力、編集力、取材・検索力、リライトする力、図書館・多様なメディアの活用（主に情報活用に関わる力）
- 司会力、対話・協議・討論する力、合意形成力、アドバイス・相互評価する力（主に交流に関わる力）
- 課題を発想・発見・設定する力、仮説設定力、学習計画立案力、軌道修正する力、意志決定力（主に課題解決の過程に関わる力）
- 比較する力、分類・整理する力、違いや共通点を見付ける力、関係付ける力、推論する力、多面的にみる力（主に思考力・判断力に関わる力）
- 報告・記録する力、紹介・描写する力、記述力、鑑賞力、創作力（主に表現様式に関わる力）

(2) 「教科を貫く国語力」の枠組の構想

教科を貫く国語力を確実に育成するためには、これまで述べてきたような視点を例えば次のような枠組で、その全体像を整理することが有効です。

	思考力	表現様式	交流形態	読書活動
低学年	順序付ける 自分の一番を決める	紹介スピーチ 観察記録文	ペア学習 進行	並行読書
中学年	比較・分類する	説明スピーチ 調査報告文	グループ協議 司会	比べ読み
高学年	多面的に追究する	提案スピーチ 意見文	会議 議長	調べ読み テーマ読書
中学校	説得力を持たせる	論評 書評	討論	評価して読む

4 「教科を貫く国語力」育成のための授業づくりのポイント

次に、「教科を貫く国語力」を育成するための、授業づくりの具体的なポイントについて考えていきましょう。その際、常に各教科等のねらいに即して「付けたい国語力は何か」を明らかにしていくことが大切です。



Point 1: 「付けたい国語力」を明示した学習指導案の作成

授業づくりにおいては、以下のように、「付けたい国語力」を本時の指導過程に明記することも有効です。その際、教科等の固有の目標をしっかりと分析し、その達成に不可欠の「付けたい国語力」を明確に位置付けたいものです。

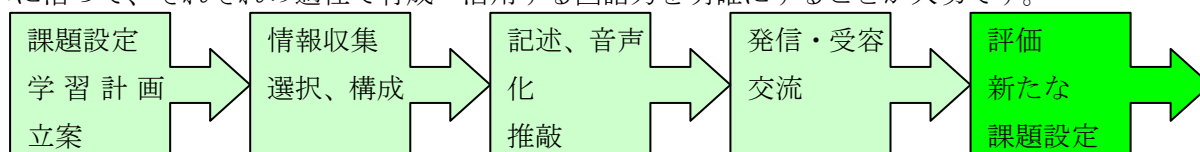
《第4学年 社会科学習指導案「ゴミの処理と利用」から》

本時の目標：見学学習で見出したごみ処理の問題点から、地球にやさしく、住みよいくらしのために自分たちができることを考え、**分類・整理して提案**することができる。(思考・判断)

学 習 活 動	主な発問、指示 (○) と予想される児童の反応 (・)	教師の支援 (・) と評価 (◎)
	私たちの市のごみの問題を解決する方法をみんなに提案しよう。	
3 ごみの問題を解決する方法を話し合う。 ・付箋紙に自分の考えを書く。 ・書いたものを分類・整理する。	○一人一人考えを付箋紙に書きましょう。 【ごみを減らすためにできること】 ・資源ごみを分別する。 ・買い物袋を持っていく。…… 【ごみを出すときに気をつけること】 ・燃えないものを混ぜて出さない。 ・生ごみの水分を十分にきる。 ○付箋紙に書いたものを似ているものでまとめ、できるものか、やってみたいことかなどを考え、ラベルを付けて提案しましょう。	・付箋紙を二つの視点ごとに分けて貼らせ、さらに同じような考えを集約させていく。 【付けたい国語力ー分類・整理する力】 ・グループで提案することは「実践の可能性」「実践の意欲度」などから判断してまとめる。 思◎ごみ処理の問題点をとらえ、解決方法について考え、提案できる。

Point 2: 学習指導プロセスの改善

国語力を発揮するのは、最終的に発表したり交流したりする場面ばかりではありません。課題設定・情報収集・構成・評価などの過程に応じて必要な国語力があります。下記のような探求のプロセスに沿って、それぞれの過程で育成・活用する国語力を明確にすることが大切です。



Point3: 発問・指示の吟味

児童生徒の良さを十分生かしながらねらいを達成するためには、発問や指示を付けたい力に応じて具体化していくことが重要です。「分かりやすく発表する」「考えをまとめる」「交流する」「読み取る」「整理する」といった発問・指示はしばしば曖昧なままに使われがちです。例えば次のように具体的にしていきましょう。

(例) 「グループの意見をまとめて発表してください。」

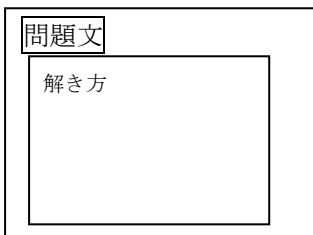
- 一つに絞り込んで提案しましょう。
- 出てきた意見を列挙して報告しましょう。
- 代表的な意見を二つ程度選び出し、対比して説明しましょう。

Point4: 子どもの思考過程に即した言語操作を位置付けたワークシートの開発

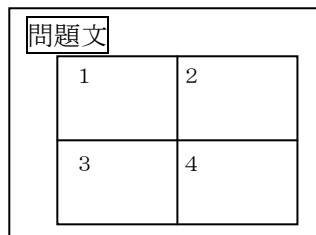
授業で用いるワークシートは、児童が主体的に言語操作できるような形式を工夫することで効果のあるものとなります。算数では、児童が自分の考えた解き方を順序立てて解説する力が重要です。その際、以下のようなワークシートを開発し、成果を上げている学校もみられます。

《自分の考えた解き方を順序立てて解説する力を育てるワークシートの開発》

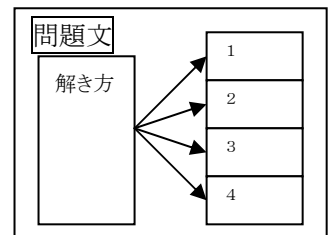
Before: ワークシートの工夫



After 1 : 改善



After 2 : 更に改善



【工夫】自分の考えた解き方をワークシートに書いて発表できるよう支援。
【課題】棒読みになりがちで説明力が育たない。

改善

【工夫】解き方を4分割記述して順序立てて説明できるよう支援。
【課題】一気に4分割しての記述は難しい。

改善

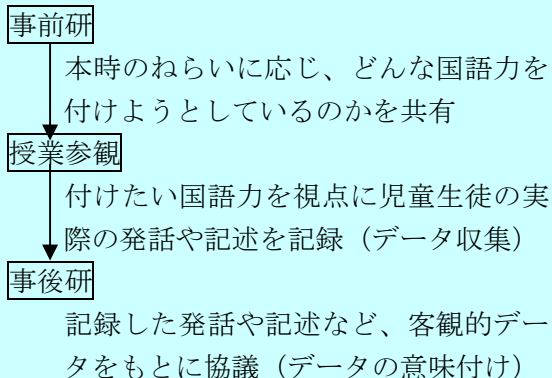
【工夫】解き方をいったん左欄に記述し、それを4分割記述できるよう欄の作り方を工夫。
【成果】自分の解き方を順序立てて解説することが可能に。

5 「教科を貫く国語力」育成のための校内研修の工夫

「教科を貫く国語力」の育成を視点とした校内研修は、学年や教科等の壁を越えて、学校の総力を挙げた研修の実現を可能にします。各学校の実態に応じた研修を工夫したいものです。

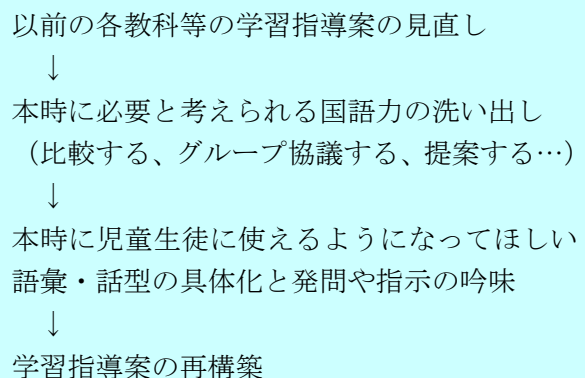
校内研修例1

「付けたい国語力」を視点にした授業研究



校内研修例2

各教科等の学習指導案への国語力の位置付け



新学習指導要領における「国語力」の記述

平成20年2月15日に公表された新学習指導要領（案）にも、各教科等における国語力にかかわる記述として、例えば以下のようなものが位置付けられています。

《小学校》

教科等	学年等	具体的記述
理科	第6学年	1 目標(1) 燃焼，水溶液，てこ及び電気による現象についての要因や規則性を推論しながら調べ，見いだした問題を計画的に追究したりものづくりをしたりする活動を通して，物の性質や規則性についての見方や考え方を養う。
生活	第1学年及び第2学年	1 目標(4) 身近な人々，社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに，それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて，言葉，絵，動作，劇化などの方法により表現し，考えることができるようにする。
図画工作	第5学年及び第6学年	B鑑賞(1)イ 感じたことや思ったことを話したり，友人と話し合ったりするなどして，表し方の変化，表現の意図や特徴などをとらえること。
体育	第3学年及び第4学年	E ゲーム(3) 規則を工夫したり，ゲームの型に応じた簡単な作戦を立てたりすることができるようにする。
道徳	第3 指導計画の作成と内容の取扱い	3(4) 自分の考えを基に，書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実し，自分とは異なる考えに接する中で，自分の考えを深め，自らの成長を実感できるよう工夫すること。
外国語活動	第5学年及び第6学年	第2 内容1(3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

《中学校》

教科等	学年等	具体的記述
社会	地理的分野	1 目標(4) 地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め，様々な資料を適切に選択，活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。
数学	第1学年	〔数学的活動〕(1) ウ 数学的な表現を用いて，自分なりに説明し伝え合う活動
音楽	第3 指導計画の作成と内容の取扱い	2(7) ア 生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり，他者の意図に共感したりできるようにするなどコミュニケーションを図る指導を工夫すること。
外国語	英語	2(1)ア (ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 (エ) 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。
総合的な学習の時間	第3 指導計画の作成と内容の取扱い	2(2) 問題の解決や探究活動の過程においては，他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や，言語により分析し，まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。

国語力育成を通して交流活動の充実を

教科を貫く国語力育成のポイント

1. ねらいに到達するための表現様式・思考力の具体化
2. 伝え合い活動を充実させるための国語力の明確化



1. ねらいの具体化

<社会>

○～住みよい暮らしのために自分たちができることを考え、発表することができる。(思考・判断) → ～提案することができる。

<算数>

○～単位量あたりの考え方をういて比べ方を考えることができる。(数学的な考え方) → ～比べ方を考え、説明することができる。

○～同分母同士の加法計算の仕方を理解することができる。(知識・理解) → ～図を使って説明しながら理解することができる。

☆目標をより具体的に表すことにより、単元を通して付けなければいけない国語力が明確となった。そのために目的意識や相手意識を持った活動を継続させることができた。

付けたい国語力ははっきりしてるんだね。



学習の最後にペアで学習内容を説明し合うことで、数学的な考え方や理解力を高めていく。

2. 国語力の明確化

◎伝え合い活動を充実させるために、活動の段階ごとに学習形態を工夫した。またねらいにせまるために、伝え合い活動で付けたい国語力を明確にして指導をした。

視点1 分かる(話す・聞く・理解する)段階

<ペア学習・グループ学習>

国語「おむすびころりん」 【音読する】
「わらくつの中の神様」 【叙述に即して読む】
音楽「リズムののってあそぼう」 【話し合う】

<ペア学習・グループ学習>

算数「分数のたし算・ひき算」 【図解表現する】
「単位量あたりの大きさ」 【解説する】

<ワークショップ形態>

社会「ごみの処理と利用」 【分類・整理する】

視点2 深める(気づく・認める・高める)段階

<全体交流>

【共感的に聞く】
【多面的に読む】
【鑑賞する】

<全体交流> <ペア学習>

【説明する】
【解説する】

<全体交流>

【比較する】

ねらいの具体化により、伝え合い活動の形態が変化



3. 付けたい国語力を明確にすると授業が変わる

Before これまでの実態

「話し合う」というだけで、そのために必要な力や方法を具体的に上げていない。

同じような話し合いになりがちで、児童に付けるべき力が見えてこない。

話し合いの場での児童への支援や評価があいまいになりがちである。

After 付けたい国語力を明確にした授業改善効果

ねらいにせまるために、どのような国語力が必要なのかを指導案に具体的に明記し、授業を構成していく。

◎ねらいにせまるため、話し合いの場での手立てを絞ることができた。

◎付けたい国語力を考えることで、学習形態や授業の組立てそのものを考え直すことができ、視野が広がった。

思考力・表現様式を明確化した学習で伝え合う力を伸ばす

1. 付けたい国語力を明確にした授業づくり

伝え合う力を高めるためには、国語科の授業だけでなく、他の教科でも、付けたい国語力を明確にして授業を改善していく必要がある。



第4学年 社会科での実践。自分たちが分かったことを全校の人に知らせる(提案する)という目的意識を持たせて、単元を構成した。

「身近な地域のごみの処理と利用に関わる事業が地域の人々の健康な生活と維持と向上に役立っていることを考えることができる。」というねらいにせまるために、見学学習から、最終的に「新庄のごみの問題を解決する方法を提案しよう」という目的意識を持たせて、単元を構成した。



「提案する」ために、関連した付けたい国語力を「分類・整理する」「比較する」とおさえた。そして、この力をグループ学習の学び合いの中で育てたいと考え、授業を構成した。

第4学年社会科

「すみよいくらしをつくる」
(小単元「ごみの処理と利用」)

本単元で付けたい国語力

- ・提案する内容を分類・整理すること
- ・聞く視点を持って、他のグループとの提案を比較して、よりよい提案を持つこと

- ・目的が明確化したため、単元の最後まで学習意欲が継続した。
- ・提案のための情報収集という見学学習の目的がはっきりしたため、ねらいにそった質問をしていくことができた。

2. グループ学習をワークショップ型の形態で



Before

これまでの実態

グループ学習での話し合いをいろいろな場面で取り入れてはきたが、そのために必要な力や方法を具体的に取り上げて指導することが不足していた。



そのため…

- ・ねらいにせまる話し合いがなかなか進まない。
- ・グループ学習の中で、活躍する児童が特定化してしまう。
- ・話し合うために、必要な力が身につかない。



After

ワークショップ型の学習を取り入れたことによる授業改善効果

- ねらいにせまるために必要な国語力を明確に位置付けた。
 - ・「提案する」ために必要な国語力→「分類・整理する」「比較する」
- ワークショップ型の学習のよさを生かした指導過程を工夫
 - ・自分の考えを書く時間を保障する。
 - ・「分類・整理する」を段階的に指導する。
 - 調べたことの列挙→グループ化→ラベリング
 - ・ファシリテータ(進行役)とプレゼンテータ(発表者)の進め方を指導する。
- ゴミ問題解決の提案を「比較する」ための視点を提示
 - ・「実践可能性」(実現できる提案か)
 - ・「実践の意欲度」(やってみたいと思う提案か)



- 見学学習とその後の発表会が、提案するという目的意識で本時の学習とつながり、たくさんの解決策を一人一人が考えることができた。
- 「分類・整理する」という方法が段階的に身についた。
- 「比較する」ための視点がはっきりしたため、他のグループのよさや違いに気がつき、発表することができた。

3. ワークショップ型の学習の中での学び合いの様子

【分類・整理する】

T: 付箋紙に書いたものを似ているものでまとめてみましょう。
まとめたら、それに題名をつけてみましょう。

C1: ○○君のこれ、「その他」かな。

C2: ○○君、これどういう意味?

C3: スチール缶はそのままでビルの鉄筋にしかならないと言っていたから、アルミのプルタブだけを出すっていうこと。

C1: それなら、「分別」に入るんじゃない?

C2: そうだね。「その他」より「分別」に入れたほうがいいね。

C3: ばくもそう思うよ。

「分類・整理する」という国語力を列挙、グループ化、ラベリングと段階的に指導する。

グループの話し合いで、自分の書いたものをもう一度分類直すことができた。



主体的な読み手を育てる文学教材の指導

1. これまでの課題と教師の願い(第5学年:国語科)

○5年生の導入単元である「新しい友達」では、場面ごとに主人公の言動に沿って心情の変化を読み取る学習をしてきた。叙述に沿って読み取る力は少しずつついてきているものの、場面や叙述を関連させて考えることができないため、表面上の浅い読みになってしまうことが多かった。

→ 物語全体を通して、場面や叙述を関連させて多面的に読み取らせたい!

○全体での読み取りは教師主導となることが多く、教師が読み取った主題へと児童を導いてしまっていた。

→ 児童が主体的に読み、その読みを児童同士で読み深めさせたい!

○単元の導入として、登場人物の説明をしたり、関連する物を見せたりするだけでは、その物語の雰囲気浸って読み取ることができるようになるまで時間がかかってしまう。

→ はじめから物語の雰囲気に浸って読み進めさせたい!



文章全体を通した
多面的な読みや、読書活動の
充実がポイント!



2. 主体的な読み手を育てるために

Before これまでの実態

場面ごとに、一人一人主人公の言動に線を引いて気持ちを考えさせた後、教師が中心となり全体での話し合い。最後に課題に対する答えをまとめさせていた。また、同じ作者の作品を読み広げるのは第3次での活動。

↓ そのために…

- ・ 心情の読み取りが細切れになり、物語全体としてとらえにくい。
- ・ 教師主導の授業になってしまいがち。
- ・ 児童一人一人が読み取ったことを生かしてあげられない。
- ・ 作者の世界観に触れるのは単元の最後になってから。

After 主体的な読み手を育てるための授業改善効果

- 多面的に読み取るために
 - ・ 段落ごとではなく、物語全体を通して読ませる。
 - ・ さまざまな登場人物の立場から読ませる。
 - ・ 児童の交流を図り、さまざまな考えがあることに気づかせる。
 - 主体的に読み進めるために
 - ・ 一人読みの時間を確保する。
 - ・ 児童の相互指名により授業を進めさせる。
 - ・ 好きな表現、友達の光っていた言葉など、全員に自分の考えを持たせ、発表させる場を設ける。
 - 物語の雰囲気に浸って読み進めるために
 - ・ 導入で同じ作者の作品をブックトークなどで読み聞かせる。
 - ・ 同じ作者の作品を並行読書させる。
- ↓
- 児童が主体的に読みを広げたり、深めたりする学習が実現。

3. 児童同士の関わりの中で読みが深まる ~第5学年国語科「わらぐつの中の神様」より~

大工さんとおみつさんの心が通い合っていると思う部分に線を引き、お互いにどんなふうに思っているのかを書き込んだ後、全体で発表。

C1:「おれはわらぐつをこさえたことはないけども、…」という大工さんの言葉から、大工さんはおれもがんばらなくちゃと思ったと思う。

T: 同じところに線を引いた人はいますか?

C2: 大工さんは、がんばって働いておみつさんを幸せにしたいと思ったと思う。

C3: そんな大工さんをおみつさんはたのもしいなあと聞いていた。

C4: 大工さんはおみつさんの気持ちがよく分かっていて、おみつさんは大工さんが自分を元気づけてくれていると感じたと思う。

T: どんなことを元気づけているの?

C4: 不格好なわらぐつだったから落ち込んでいたけど、大工さんの「いい仕事っていうのは見かけで決まるもんじゃない。」という言葉で、おみつさんは元気づけられた。

C5: 大工さんは自分の考えが伝わるといいという気持ちで話していると思う。

C6: 付け足して、自分の考えだけじゃなくC4さんが言ったように、おみつさんにもがんばってほしいという気持ちを伝えたいんだと思う。

C4: その後に「おみつさんはこっくりこっくりとうなずきながら」とあるから、おみつさんに大工さんの気持ちが分かってきた。自分にも夢があったらと思っている。

児童の相互指名で話し合いを進行。児童主体の学習を展開。

教師は読みを全体へ広げるための補助質問をする。

友達の考えを聞き、自分の考えを深めている。



学ぶ力を支える基礎力として

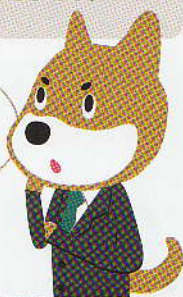
教科を貫く国語力育成のポイント

1. 学校研究と関連付けた『国語力』の育成
2. 全教科共通の視点による授業研究
3. 校内全体における言語環境の整備と総合学習の取り組み

本校で付けたい国語力とは

学校研究テーマ「学ぶ力を育てる学習集団づくり～小グループを生かした問題解決的な学習をとおして～」の「**学ぶ力**」を支える**基礎力**としてとらえる。

「国語力育成」は事後研の柱として有効に機能します。



学校研究との関連付け

学校研究推進のためのキーワードにおいて育成できるものと考え、授業研究の中で取り組む。

- 学習指導案における『教科を貫く国語力育成』の観点の位置付け
- 本時の指導過程に「国語力との関連」の記述
- 事後研究会における『国語力育成』の観点での話し合いの場の設定

成果と課題

👉 Before これまでの実態 👉 After 研究の成果

取り組む前

- ・全教科共通の理解が図れるか不安である。
- ・学校研究の深まりがもう一步。
- ・学習指導を行うにあたって必要なことだが、今まであまり深く意識してこなかった。



取り組んだ後

- 授業を組み立てる時に国語力を意識するようになり、教科の特性を見直すきっかけになった。
- 教科で付けたい国語力を考えるいい機会になり、指導上の留意点や手立てがはっきりと見えてきた。
- 他教科の授業を同じ視点で見ることができたため、研究を学校全体のものとして実践することができた。
- △国語力はあくまでも教科のねらいを達成するための基礎力の一つとしてとらえる必要がある。

総合学習と言語環境整備

総合学習における朝読書

- 継続的な朝読書
- 学年ごとの必読書によるクラス一斉読書
- 読後の感想文交流

読書指導

- 委員会活動による学級文庫
- 授業と関連付けた読書
- 教師による本の紹介

校内の言語環境整備

- 言語環境に配慮した掲示
- 話し言葉への配慮

学級活動の取り組み

- 新聞記事を用いたスピーチや班ノート

参加

⇒学習者の意欲を引き出すための見通しのある課題設定
課題の言語表現的な吟味・学習プリントの活用

協同

⇒他者とのコミュニケーションによる話し合い・練り合いの効果的方法
グループ学習のさせ方(グループ編成の方法・生徒の役割・話し合いの手引き)

表現

⇒自分の考えを的確に表現させるための具体的表現方法
表現様式の確定・表現形式の手引き作り

グループ討議による段階的・反復的学習が自立した学びを実現させる

「考えを効果的に伝える～さまざまな情報に学んで～」第3学年国語科

1. グループ討議によるさまざまなテキストの比較読み

- 教科書教材「言葉の力」と「人はなぜ書くのか」(教出)を比較読みし、論理の展開の違いをとらえる。【一斉学習】
- ↓
- さまざまなテキストの論理の展開を、一斉学習で学んだ学習方法を生かしてとらえる。【グループ討議】
 - (1) 新聞記事と投書の比較読み …グループ討議1
 - (2) 政府公報 …グループ討議2
- ↓
- 自分の意見が効果的に伝わるように論理の展開の工夫を生かして、意見コラムを書く。【グループ討議による推敲】
 テーマ「よりよい朝日中学校を作るために
 ～2年生に自分の考えを効果的に伝えよう～」
- * 生徒会役員選挙を控えた2年生に、3年生として伝えたいことを自己選択して書く。(明確な目的意識・相手意識)

本単元で付けたい言語能力

【さまざまな文章を比較読みする】
【グループ討議】
【論理の展開をとらえ、自分の表現に生かす】

↓

- 段階的・反復的学習をさせる単元構成を組むことが鍵となる。
- さまざまな文章を読もうとする態度を育成するために、補助教材の活用が必要である。

「新聞記事」「公報」「意見コラム」といった表現様式の明確化が国語力育成の決め手!

2. 討議を深めるための手立て

Before もし手立てをとらなかったら **After** 討議を深めるための手立てを行った授業の成果

<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを持たせずにグループ討議をさせたら、自分の学びの変容を意識することなく、学びを次に生かそうという意欲につながらなかったであろう。 ○明確な視点と目的のない討議をさせたら、深まりのある活発な話し合いの姿はみられなかったであろう。 ○具体的手立てを講じずにグループ学習をさせたら、生徒にとってやりにくい深まりのない学習で終わったであろう。 		<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを書いた後に、グループ討議 →自分の学びの変容の自覚 ○リーダーによる「話し合いの手引き」に沿った討議進行 →自信を持った討議のリード ○筆者の主張・客観的根拠となる事実・理由付けの組立を討議するという明確な視点 →活性化した話し合い ○同じ形式による討議用学習シートの活用 →段階的・反復的学習による学習への自信 ○互いの考えを交流するための付箋紙の活用 →自ら学ぼうとする能動的姿勢 ○討議内容を生かす場(表現活動)の設定 →目的意識と学習意欲の喚起
---	--	--

3. 自立した学びの実現〈学習を終えた生徒の感想から〉

- ★客観的事実が理由付けを引き立て、理由付けが主張を支えているという3つの柱が成り立つことで説得力のある文章になることを学んだ。できれば町報などに自分の意見を書いてみたい。
- ★ただ読むだけでなく、理解し、その内容を追究することができた。一人では小さかった視点も、グループ討議で大きく広がった。意見コラムを読んだ2年生が自分の考えを感じ取ってほしい。
- ★何気なく読んでいた投書も読むのが楽しくなった。これからも学んだ読み方を生かしていきたい。
- ★相手からの意見を読むのは簡単だけれど、自分が意見を伝えるのはとても難しいことだと思った。これからもいろんな本や新聞を読み、学習していきたい。

観察・実験の処理・結果から結論の導きに必要な言語能力

1. 理科の授業形態から考えられる基盤となる力

形態

- 1. 課題をつかむ 2. 実験・観察をする
- 3. 結果を出す 4. 結論を導く



国語力

- 自然事象・科学的事象を読み取る力(読解力、比較力、洞察力)
- 推論する力(推理力) ○話す力、書く力(説明力)

2. その力の育成が理科授業の目標達成に不可欠

(1) 生活に役立つ知識がうまれる課題設定(学習の方向性が見える課題)に心がける。そのためにも、教科書にある課題を生活に役立つ課題にアレンジし、課題を読み取る力を育成する手だてをとる。

教科書課題

炭酸水素ナトリウムを加熱するとどんな物質に変わるだろうか。

アレンジ課題

ベーキングパウダーをホットケーキに入れて加熱すると膨らむのはなぜか。

気づき 気体発生

手立て 膨らんでいるケーキ&膨らんでいないケーキの比較

教科書課題

唾液はデンブンを何に変えているのだろうか。

アレンジ課題

ご飯をかんでいると甘くなるのはなぜか。

気づき 唾液分泌

手立て ご飯を含まない口内&ご飯を含んだ口内の比較

(2) 観察・実験のデータ・結果を結論としてまとめるために、形式的表現方法を取り入れる。

例1 たぶん……だろう。

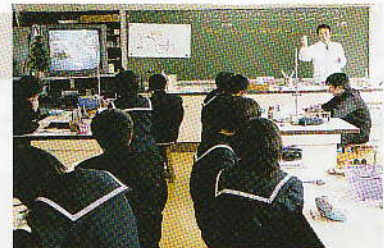
例4 ……に違いない。

例2 ……だから……といえる。

例5 ……とも考えられる。

例3 ……なのは……だからだ。

さまざまな組み合わせ



3. 自分のものになる結論

Before 課題提示の工夫のみ

After 課題提示と手立てと表現方法

○生活に役立つ課題をアレンジし提示。

↓ そのため…

○データの処理と結果のまとめを文章化できる。気づいたことをまとめられた。

↓ しかし…

○教科書で求める知識を得ることができても、課題を解決した結論に結びつかない場合が多い。また、自分の考えを整理できない場面がみられ説明できない。

↓

○説明できず、生活に生きる知識にならない。

○生活に役立つ課題をアレンジした提示と手だて

↓ そのため…

○解決する手段を考えながら、積極的に作業をし、データの処理と結果のまとめを文章化できる。気づいたことをまとめられた。

↓ 形式的表現方法の導入

○処理とまとめに加えて、理由付けされた考え、課題に対する結論が生まれた。課題を常に把握していた。

↓

○家族や後輩に身近な現象を説明できるため、役に立つ知識となった。(生徒より)

4. 説得力ある表現と科学的思考の深化

Aさんの思考と説明力

唾液がでることによってデンブンがなくなって糖分が出ると思う。(方法不明)(指示薬不明)(結果不明)

水上置換法で集めた気体に石灰水を入れると白く濁ったから、ベーキングパウダーを入れると二酸化炭素が発生し、ケーキが膨らむ。
(水上置換法)(石灰水)(白濁)(二酸化炭素)

B君の思考と説明力

実験結果から、唾液はデンブンを甘くするものがふくまれるということ。(方法不明)(指示薬不明)(文章がおかしい)

1回目の実験は失敗し、2回目は石灰水を入れて振ったら白く濁った。だから、ベーキングパウダーには二酸化炭素が含まれておりそれが発生するから膨らんだ。
(実験の回数)(石灰水)(白濁)(二酸化炭素)

[キーワード] 教科を貫く国語力、授業改善、アクションリサーチ、Before-After 方式、表現様式、学習指導要領、思考力、言語活動

[人数規模] D（開発拠点校全教員及び公開シンポジウム参加者、合計約400名）

[研修日数] D（開発拠点校教員）

【問い合わせ】

国立大学法人山形大学

地域教育文化学部地域教育学科

〒990-8560

山形県山形市小白川町1-4-12

TEL 023-628-4387